

第五章 魔物

一 リクルートゼロ

平成十四年度の三年生 進藤（愛野） 和田（愛宕）

昨年度の三年生は史上最強と思われるリクルートができた。昨年度の新入生は平成十五年の長崎インターハイの時の三年生になるのでこれもまた最高のメンバーを集めなければならない。頑張つて県内の優秀選手はすべて声を掛け、県内の優秀選手はほぼ獲得できた。特待生梓オーバーで獲得したのでこの年度のリクルートはゼロである。瑞穂中学校から志願した進藤と佐世保の愛宕中学校から志願した和田は自主志願で来てくれたが、平成十三年の史上最強軍団と長崎インターハイ主力選手軍団の間に挟まれたこの学年は戦力としても期待できなかつたし世間からも注目されなかつたので可愛そうだった。

平成十三年一〇月 地区新人戦 優勝 スタメン 谷川 林田 立川 二宮 清水

【案内文書】

ウインターカップ予選の案内文書に「ウインターカップ予選をどう戦うかということよりもそれを跳び越して本国体（仙台）のことが気になります。それと同時に、本国体終了後に待ち受けている長崎地区新人戦のことも気になります」と書きました。ですから、前記のスタメン五人を個人としてではなくチームとして見ながらこの一ヶ月手を加えてきました。すると、さまざまな身体的症状が出てきました。

皮切りは谷川。膝が痛いと訴えてきました。ジャンパーズニーでした。

次に立川が足の甲が痛いと訴えてきました。中足骨の疲労骨折でした。

次もまた立川。練習中に他の選手の足にひっかかって転倒し、左肩を痛めました。

次もまた立川。エンドライン付近で他の選手ともつれた際に足首を捻挫してしまいました。

さらに、清水が腰が痛いと言いました。

少し遅れて今度は二宮も腰が痛いと言いました。

とどめは谷川の足首捻挫でした。県総合選手権の直前に捻挫してしまい、初戦に出られませんでした。谷川の捻挫は一〇日ぐらいいは無理させられない捻挫ですが、他の選手の傷害はすべて軽いもので、痛みと相談しながら練習は継続できる程度のもです。練習がハードになったワケではありません。一人ひとりの役割がはっきりしてきて責任範囲が明確になってきただけです。するとこうやってちょこちょこあちこちを傷める選手が出てくる。それは、責任というストレスに身体をいじめられた結果です。新チームはまだその程度のレベルだということです。

一年生が入学して半年。隠れていた長所が表に出てきたり、見逃していた短所が表に出てきたりして、一人ひとりの人物像がはっきりしてきました。そういう場合は大抵長所よりも短所が多く見つかるものです。私は長年のコーチ生活でそんなことには慣れていますが、選手たちは初めて見るそんな自分に振りまわされます。そして前述のようなことが起こるのです。

強い選手はこの時期を短期間で乗り切つて先に進みますが、弱い選手はいつまでも引きずります。よく、人を伸ばすには長所見つけて誉めてやるのが大切だと言われますが、それは選手とともにどろんこになつて戦つたことのない教育評論家が言うセリフだと私は思っています。人を伸ばすには、自分の短所から目をそらすとする選手の首根っこを押さえつけてでもイヤというほど自分の短所を見せる。そして自分のどん底を見た選手がそこから這い上がる努力を、自分も汗みどろになつて手伝つ。それが指導者にとつて最も大切はことだと私は思っています。

【結果報告】

私のベンチ采配は実に見苦しいものでした。私は日常の練習では厳しいことばで選手を追いつめることがあります。他校との練習試合や公式戦で選手をなじることはしません。しかし、今回の試合は終始ベンチから選手をのしり続けていました。

話は九月下旬のウィンターカップ予選にさかのぼります。決勝戦の相手は純心。純心は新チームなので鶴鳴も新チームのメンバーで臨みました。前半を終了した時点で鶴鳴二点のビハインド。意地を張り過ぎて後半も一年生だけで戦わせ、もし負けでもしたらウィンターカップには出場できないので後半は三年生を投入し、大差の勝利で切符はもぎ取りました。

この時点で新チームの選手たちは危機感を持たなければなりません。新チーム同士の闘いでは負けたのですから。私は、ウィンターカップ予選以後の練習内容を三分の二は主力選手主体に、三分の一を新チーム主体に切り替えました。それをもとに、新チームの選手たちは国体のことなどアタマの中から消し去り、国体直後に控えている地区新人戦のことだけを考えて日々を過ごさなければならなかったのです。

特に国体期間中は全国の強豪が相手ですから一年生の出番は少なく、しかも国体の食事はご馳走で三食おいしいものを食べてエネルギーは消耗しないという生活が一週間続きますからそのままと身体が鈍ってしまいます。ところが、一年生の表情にも行動にも具体的に何の変化も起きません。

そんな一年生の間抜けさにならずと腹がたっていました。下級生を導くことにまったく気が利かない三年生にも腹がたっていました。それに火をつけたのが谷川です。国体前の大事な時期に足首を捻挫し、国体では半分ぐらいの力しか出せなかったにもかかわらず、この新人戦の初日に相手の足を踏んづけてしまつて捻挫をしたのです。これで私の怒りが爆発してしまいました。

身内の方々や鶴鳴ファンの方々には敢えて申しますが、「まだ一年生なのにかわいそう」ではありません。意図的に自分を改革しようとしなければ「まだ一年生だから」が来年は「もう二年生なのに」となり再来年は「一年の時から変わっていないなあ」になります。「ケガは仕方がないでしょう」ではありません。ケガをしない選手が実力のある選手なのです。ついでに言いますが、有能な選手は五反則退場もしません。

ウィンターカップ予選が終わった時点で、「一年生は危機感を持って練習しろよ」と私がアドバイスしたら傷は浅くて済んだかもしれません。三年生に「地区新人戦に向けて、下級生にちゃんとアドバイスしてやれよ」と指示したらもう少しなんとかなつたかもしれません。しかし私は、わかりやすいことばや態度や具体的な行為で選手には毎日サインを出しています。指示待ち族は私の門下生からは出しません。私のサインを読み取って自ら行動に移せるようになるまで、たとえ見苦しいと言われようが厳しすぎると言われようが、追い込みはやめません。

平成十三年十一月 県新人戦 優勝 スタメン 谷川 林田 立川 二宮 清水

【案内文書】

先の九州総合選手権にはぶつつけ本番で谷川を試合に出しましたが彼女は地区新人戦後三週間練習に参加していません。これからは少しずつチーム練習に参加できるようにするでしょうが、そうなたとしても県新人戦の谷川はぶつつけ本番に近い状態でしょう。個人技や体力という面ではそれでも一向にかまわないのですが、システムの中で谷川が自分自身を機能させることができるかどうか難しいところです。一方、チーム全体としては、新チームで試合を成立させるためには条件が限定されます。

まず、マンツーマンディフェンスでは試合ができません。かといって立っているだけのゾーンディフェンスではおもしろくないので積極的に相手を潰しに行く攻撃的なゾーンディフェンスを採用しなければなりません。そこで今年は、三二、二二、三一、三一の三種類を使い分けようと思います。

セットプレイでの確実な得点は今は望めません。ですから速攻による得点を増やさなければなりません。将来立川は、フォワードとしてアウトサイドプレイヤーに仕立てるつもりですが、現在の彼女の能力を試合で活かすためには、清水とともにインサイドでプレイさせなければなりません。それをシステムの中に

取り込んで、他の選手にもそれを理解させる必要があります。というわけで、新チームは三年生と同じことをやらせては強くなりません。

そこで地区新人戦の前にウィンターカップ用の練習と並行して新チーム用のための内容を少しずつ盛り込みましたが、それは三二のゾーンディフェンスを少しだけ練習させただけで、それ以外の内容は三年生と一緒に練習しながら個人の特性についてだけ手を加え、地区新人戦に臨みました。

地区新人戦以後、前述の条件に基づいた練習内容を少しずつ増やしていますが、このようなことは作戦盤で図解してもらったりことばで説明してもらっただけではなかなか自分のものになりません。実際に身体を動かしてみなければ身に付かないのです。谷川は説明を聞いただけ。仲間の練習を見ていただけ。ですから谷川にとっての県新人戦は、それらのことを学習する場でもあるし、失敗の許されない真剣勝負の場でもあるわけです。アタマが混乱してまたケガをしなければいいのですが…。

ともあれ、実際に地区新人戦を見たりその試合のビデオを見たりした方々は「これでは長崎ゆめ総体が優勝なんてとてもとて…」と思われたはずです。それは選手自身が一番感じていて、ようやく自分が如何ほどのものかわかりかけてきたところです。選手にとっても私にとっても、思わぬ誤算や意外な弱点発見との泥沼の闘いが始まりました。これからの闘いで選手一人ひとりの本当の資質が明らかになってきます。これから大切なことは、選手は自分を直視すること。周囲の者は同情の手を差し伸べないことです。

【結果報告】

九州総合選手権後、立川と清水の長身選手を活かす動きを練習の中に取り入れ、三年生相手のスクリメージで実践的な練習をしました。また、ディフェンスでは一三二ゾーンの動きと狙いを教え、三二ゾーンと併用しながらこれも三年生相手のスクリメージで覚え込ませました。ディフェンスではさらに、一三二のゾーンプレスも教えました。

そのほかの練習ではオールコート走り回る練習、例えばオールコートドリブル一対一・スリーメン・スリーメン二対一・オールコート三対四・LMUなどをたくさん取り入れました。オールコートを走り回る練習をたくさん取り入れた理由はディフェンスで積極的にボールを奪って速攻を仕掛ける攻撃方法は攻撃のセオリーを完璧に理解できなくても得点に繋がるからです。

ご承知のように鶴鳴の新チームのスタメンは全員一年生です。一年生にバスケットの奥の深さとか攻撃のセオリーを理解させるのはまだ無理です。だから、元気と勇気（蛮勇でもかまいません）さえあれば結構戦える武器となることを多く取り入れたわけです。

短期間の練習にもかかわらず見違えるほどよくなったのは立川と清水のディフェンスです。ペイントエリアで相手にボールを持たれたら絶対に手を下げないで守ることを教えただけで地区新人戦とはまったく違うディフェンスになりました。ボックススコアの中のブロックショットの本数を見て、立川がいかに相手にとって邪魔になっていくかわかりでしょう。ブロックショットだけでなく、立川は簡単にドリブルで抜かれることもなくなりました。

十一月五日付けの案内文書に谷川が心配だと書きましたが、それは試合前日の十一月十六日まで続きました。九州総合選手権後に九州女子高校と小林高校を招待して合宿をしましたが、九州女子の池田先生が「三年生の中でやっている時の谷川と、こうして新チームでプレイしている時の谷川は全然違いますね。やっぱり自由によっている時と違って責任を背負ってやる時はこんなに消極的になるものなんです」と評したようにまったくダメでした。その後の三年生相手のスクリメージでもそれは続き、とうとうそのまま県新人戦を迎えることになってしまいました。

自信をなくしたのではなく、臆病になったわけでもありません。彼女は彼女なりに「力でねじ伏せるだけではダメ、正しいバスケットを理解できなければ本当に強い相手には通用しない」と、私から言われ続けてきたことを自分のものにしてしようと思ひ、それ故にすべてが中途半端になってしまったのです。

そこで私は、この新人戦で谷川に出すベンチからの指示語は「いけ！」と「やっつしまえ！」のふたつだ

けに絞りこみ「待て！」とか「パス！」などの否定的な用語やブレイの種類を指示する声は出さないようにしました。それは功を奏しました。自滅もたくさんありましたが谷川らしいブルドーザーみたいなブレイが久しぶりに蘇りました。これで、ウインターカップ予選の前半、一年生だけで戦って純心の新チームに負けずたあの日からずーっと気になっていたことがいつぺんに吹っ飛んでしまい、なんの憂いもなくウインターカップに向けて全力集中できます。

平成十四年一月 九州春季二次予選 優勝 スタメン 谷川 林田 立川 二宮 清水

【案内文書】

前年の地区新人戦の案内文書に選手のケガのことについて書きましたがその続きを書きます。

その後谷川は、県総合選手権（一〇月六〜七）・本国体（一〇月十三〜十七）・地区新人戦（一〇月二〇〜二一）・九州総合選手権（十一月三日）・県新人戦（十一月十七〜十九）と五大会連続ぶっつけ本番で出場してはまた足首を傷めるという繰り返しで、さらに今度は十二月九日の国体選手一次選考会の三地区対抗戦で左足首を捻挫し、ウインターカップ前にまた外さなければならなくなりました。それに加えて立川が十二月上旬に右足のスネが痛いと言いました。脛骨上部の疲労骨折です。最低一ヶ月は無理させられないでしょう。

一月三日から七日まで恒例の招待合宿です。他県から五チーム集まります。五日間強化試合の連続です。立川はおそらく強化試合で使うのは無理だと思います。この合宿では、谷川の足首にこれ以上ダメージを与えないよう気を配りながら谷川・二宮・林田の目を鍛え、成井・進藤・和田・黒石に短時間でよいから試合を繋ぐことができる力をつけさせ、立川を出さなくても県内では勝てるチームに仕立て上げなければなりません。清水の問題はスタミナだけです。当面の課題はゾーンディフェンスの強化とプレスオフフェンスのマスターです。

今回の大会はとても大切です。なぜなら、八月の九州国体に影響があるからです。本国体の出場枠は九州国体でブロック優勝した二チーム。九州国体は四県ずつにわけたブロックリーグ戦です。各ブロックのシードは六月の九州大会で決勝まで進出した二県のみ。六月の九州大会のシードは二月の九州春季選手権でベスト四に入った四チーム。二月の九州春季選手権のシードは前年六月の九州大会のベスト四。昨年六月の九州大会は鶴鳴が決勝に進出しているので、長崎第一代表は今年二月の九州春季選手権では第二シードとなつて中村学園の対角線に置かれ、準決勝では福岡第一と対戦する組合せになるでしょう。ですから、平成十四年度の本国体出場の可能性を高めるには、今大会をまず長崎一位で抜け、そして二月の九州春季選手権では福岡第一を破らなければなりません。今、この時点で九月一日の九州国体を見据えた分析を始めなければならぬのです。

【結果報告】

いつもは試合翌日には結果報告をお届けするのですが今回は遅れてしまいました。すみません。実は私、一月十八日と十九日はだけは外泊許可をもらって試合会場に顔を出しましたが、一月九日から二一日まで入院してたんです。まずそのことからお話ししましょう。

一月九日夕方六時三〇分。練習の終わり頃急に左下腹部が痛くなりました。下痢なのかなと思ってトイレに駆け込みましたが下痢ではありませんし排便後も腹の痛みは治まりません。痛みは治まりませんがとりあえず通常通り練習を終わって選手を寮に送り届け、それから自宅に戻って、「一晩寝れば治るだろう」と思いながら早めに床につきました。しかし痛みは増すばかり。どうにもがまんできなくなったので夜中の十二時半にスクーターに乗って十善会病院の救急外来に飛び込みました。

私は最初、急性大腸炎と思っていました。でも痛みが尋常じゃないので、部位とか痛みから判断して尿路結石か腸閉塞かとも思いました。そう決めつけるには少し条件が足りないと思いつつ、救急外来で「尿路結石でしょうかねえ？」と尋ねましたが川下医師は即座に「尿路結石なら腰部の痛みがそんなものじゃありません」

の残り二分でやっと逆転、純心戦は第四クォーターに入ってようやく逆転と、まさに薄氷を踏むような勝利でした。

試合中「いかん！二宮の頭が寝てしまっている！」「危ない！谷川の目が猫の目になってしまった！」など、試合運びの中心になるこの二人でさえそんなことが頻繁に起こるのですから林田以下他の選手たちは「おっと危ない」の連続です。

それでも心の底から怒りが込み上げてくることはまったくなく、主導権が取れないまま相手ペースで試合が進行している中でもイライラは感じませんでした。むしろ心は澄み切っていたという方が当たっているでしょう。たぶんそれは、どんな状況下でも選手たちの心が無心だったからだと思います。もたつきの原因は経験不足による幼稚さに由来するものがほとんどです。そんなものは経験を積み重ねることに緩和されていきます。

試合を観ていた方は純心戦の第四クォーターにドリブルで攻撃に向かったあと谷川を私の目の前に呼びつけて怒鳴ったのを目撃されたと思いますが、あれとて心底怒ってはいません。試合も終盤に近づいたし、練習ではなく本番の試合を通して本当のことを覚えてもらおうと思ったのであのように激しい口調になっただけです。無心というのはいいものです。私は選手たちに「本当によく戦った」と言ってやりたいし、今回の試合は選手一人ひとりを人間的に大きく成長させてくれたと確信します。

最後に林田と立川のことについて報告いたします。

立川は疲労骨折で約一ヶ月休ませた後、正月合宿あたりからリハビリメニューで調整しながら徐々に復帰させ、今回少しずつ試合に出してみました。ところが、最後の純心戦でルーズボールを追っかけた時に相手の選手と衝突し、治りかけていた疲労骨折の部分を相手の膝に思い切りぶつけてしまい、転げ回って痛がっていました。まだ少し膨らみが残っている骨膜に亀裂が入ったかと心配しましたが、エックス線撮影の結果それはありませんでした。でも、これでまた本格的な復帰が少し遅れ、来月の九州春季選手権には間に合いません。

林田は私の入院中にスネに痛みを感じていたらしいのですが、そのままフルメニューで練習は続けていたそうです。エックス線撮影をしなくてもそれは疲労骨折です。彼女は試合終了翌日からリハビリメニューで、チーム練習からは除外しています。これから一ヶ月半はかかるでしょうから、これも九州大会に出場したとしてもチヨイ役で戦力としては期待できません。でも心配ご無用、三月の春休みまでには軌道修正してクレインズ号は再び離陸します。

【温泉】

この試合の采配は入院中に外泊許可を貰って病院から試合会場の諫早市小野体育館に通った。私がそんな状態なので選手の輸送は短大本部事務局の三根氏がやってくれた。私の輸送は理事長が自ら自分のクルマで迎えに来てくれた。おそらく、鶴鳴の歴史の中で理事長に運転させて試合会場を往復した監督は私しかないだろう。

しかも、初日は一試合目と二試合目の間が空く。その間小野体育館では休憩する部屋もないだろうから理事長は自分のクルマのシートを倒してそこで休んでおけと言っ。そこまでしてもらわなくても大丈夫だった。理事長の配慮に甘えて休ませてもらうことにした。まだある。少し休んだあと理事長は私が退屈しているのではないかと思ったのだらう。「どこか行きたいところがある？」と言った。私は「そうですね、入院中ずっと風呂に入っていなかったの温泉に行きたいですね」と言った。理事長は「よし行こう」と言っ。小浜温泉に向かい、鶴鳴が駅伝の時に定宿として使っているつたや旅館に私を連れて行った。そこで露天風呂に入った。

温泉から上がったあと理事長は「何か食べたいものがある？まだ入院中だから何でも食べられはしないだろうけど」と言った。「そうですね、入院中の栄養はすべて点滴だったので、胃に優しく味わえるもの、うーん、そうですね、素うどんがいいからだし汁の味を味わいたいですね」を私は言った。

ところが、小浜の和食屋に入ってワクワクしながらうどんの汁をすすったとたん。「味が無い！」と私は言った。鯉のかおりも昆布の臭いも醤油の味も何ももしないのである。私は三七歳の時にナットクラッカー症候群（初版のチームを創るで述べている）で四ヶ月と二日の長期にわたる絶対安静（大便以外はすべてベッドから起きあがってはいけない）の入院をしたことがあるが、絶対安静が解けてベッド脇に立った時に足がジンジンして立てなかった。足の裏を見てみると、バスケットダコでこつこつしていた私の足の裏は、ツルツルプロポヨで赤ちゃんの足の裏のようになっていた。味覚も足の裏も、使わなければ退化するのだ。ともあれ、そんなわけで理事長に運転してもらってVIP扱いで二日間長崎と諫早を往復したわけだが、長いコーチ生活で試合と試合の合間に温泉に行ったのはあとにも先にもこの時だけである。

平成十四年二月 九州春季選手権 二回戦敗退 スタメン 谷川 林田 立川 二宮 清水

【案内文書】

三年生は一月二十四日に学年末試験が終了し、あとは三月一日の卒業式まで四〇五回登校日があるだけでそれ以外の日は自宅学習です。が、今年は一年生主体のチームでプレイを教えるのに手間がかかるので、三年生には登校日でない日も朝練を手伝ってもらっています。だから今年の三年生は朝練を手伝ったら一旦帰宅し、また放課後に登校して午後の練習を手伝うという日々を送っています。大変お世話になっていきます。

それでも一年生はなかなかうまくなりません。いや、うまくありませんというより言われたことを理解できません。「はい」と返事はするのですが、指摘されたことがその直後に起こっても、言われたことを意識してプレイしようとする気配が感じられない場面が何回もあります。高校生時代の一年間の差というのがどれほど大きいものかを痛感させられている毎日です。

立川は二八日から松葉杖なしで歩けるようになりました。九州大会は痛みは消えないながらもほんの少しは試合に出せるかもしれません。出さなければ勝てないというのでもなく、試合に出して経験を積ませたいというわけでもないのですが、長い間チーム練習から遠ざかっているのでも少しでも試合に出してやるのが本人の精神衛生上いいのではないかと思うのです。林田も同じく、先日の試合直後からリハビリメニューですが、これも痛みは消えないながらも試合に少しずつ出そうと思っています。立川と同じく精神衛生上の配慮です。

そんなわけで二次予選以降の練習はメンバーがまったく揃わず、チーム練習ができないので部分練習主体でやっていますが、その中でも特に谷川と二宮のプレスティフェンスに対するボール運びとハーフコートオフェンスのスペイシングやタイミングを理解させることに大半の時間を費やしています。

このような選手たちで戦うわけですから沖縄での試合はどんな展開になるのか私にも見当が付きません。二次予選同様あの手この手を駆使して戦っていかうと思っています。

私事になりますが、二八日から少しずつランニングを開始して平常に戻しています。まだ時々微熱が出りますが、微熱が出た時は静かにしていると治まります。ご心配おかけしました。

【結果報告】

| | | | | | | | | | | |
|---------|--------|--------|-----|------|-----|------|-----|-------|-----|-------|
| 検査日時/項目 | 白血球 | (八〇〇〇) | GOT | (40) | GPT | (35) | LDH | (435) | CPK | (二〇八) |
| 入院当初 | (一ノ一〇) | 九八〇〇 | 六一 | 三九 | 七五四 | 三九二 | | | | |
| 入院中 | (一ノ十五) | 五八五〇 | 三六 | 四二 | 九九一 | 七〇 | | | | |
| 退院後一週目 | (一ノ二五) | 四八〇〇 | 三五 | 三七 | 六三四 | 六八 | | | | |
| 退院後二週目 | (二ノ七) | 四六〇〇 | 七二 | 六一 | 七三〇 | 六一四 | | | | |
| 次回検査日 | (二ノ二七) | | | | | | | | | |

退院後の血液検査の翌日からトレーニング開始。毎日七〇八キロ走りました。三日目ぐらいから右足太ももの筋肉痛が次第に強くなり、それが長引いて軽い肉離れ状態になったのでCPKの値が上がったのだと思います。それに伴っての現象なのか他に何か原因があるのかLDH・GOT・GPTも上昇しました。次回

の検査の結果で走るのを控えるか継続するか決めます。

現段階でのスタメンは谷川・林田・立川・二宮・清水ですが、その五人以外は公式戦で主役を担うのは無理です。しかも、スタメンの五人ですらバスケットを理解させるのにまだまだ時間がかります。そんなに層が薄い上に、十二月上旬から一月中旬までは立川抜き（疲労骨折）。一月中旬から本大会直前までは立川に加えて林田も抜き（疲労骨折）。さらに、谷川は試合の度にあちこち傷めてこれまた様子を見ながらの練習しかできず、この二ヶ月は満足にチーム練習をやっていません。

二回戦の佐賀清和戦。ずっと負けていた試合を、最後の二〇秒を切った段階で九分九厘勝ちまで持っていたのですが、ゴール下のシュートがポロツと落ちて延長戦にもつれ込みました。延長戦は林田抜き（五反則退場）。それに谷川が右足太もものけいれんで思うように動けません。延長戦は十二 六で負けました。ロクに練習をしないで結果だけは得ようと思っただけだと思っています。

一年生だけにしてはよくやるとか、来年が楽しみだとか、クレインズ派の方々からはそんな声を聞きますが、私から見れば顔つきも態度もこどもレベルから抜け出ていないし、理解の度合いも浅くて遅いし、肝心な時にケガが多いし、どの角度から見ても「来年こそは」と期待を持たせる要素はありません。これから三月までは部分練習をこなしながらケガを治し、心身ともに健康で春休み遠征に出かけられる状態にすることを第一に考えながらやっていきます。

このチームの浮沈は春休み遠征にかかっています。ケガの回復に気を配らなければならないとか、バスケットを理解させるのに手間がかかりすぎるとか、そんなこんなで春休み遠征を充分活用できないようであれば来年度の長崎ゆめ総体でよい結果を出すのは無理です。これから一ヶ月。選手たちは危機感をもって日常生活を送らなければなりません。

平成十四年四月 県下春季選手権 優勝 スタメン 谷川 清水 岩永姉 岩永妹 金床

【案内文書】

別紙春季強化事業報告のとおり、三月二三日に長崎を発つて四月四日に帰ってくるまで十二日間連続武者修行をしてきました。主力メンバーは疲労困憊。ズタズタになって帰ってきました。途中、清水が風邪を引いて休んだり、立川が疲労骨折（前回とは逆の足）になったり、岩永妹が徳島で捻挫するなど、いくつかのアクシデントはありましたがそれと引き換えにしてもおつりがくるほどの収穫がありました。収穫というのは、岩永姉妹（まだ入学前ですが、ちょこちょこ使ってみました）が春季戦から戦力として充分期待できるとわかったことと、金床（これもまだ入学前）もやがてその仲間に入るだろうという見通しが付いたことです。

それがなぜ重要な意味を持つかという点、岩永姉妹は一年生ながら試合を組み立てる能力があるので谷川が安心して得点を取ることに専念できます。次に、二宮・林田・立川にバスケットを教えるのにゆとりができます。そのことを説明しましょう。

二年生になった今もこの三人は本当に強い相手に通用するほどバスケットを理解できてはいません。だから、地区新人戦から九州春季大会までのスタメン構成でいくと、この三人は試合の中でバスケットを勉強しなければならぬし、試合にも勝たなければならぬという二重のプレッシャーを負うことになります。

人間というのは、厳しい鍛錬を経なければ成長しませんが、常に追い立てられながら勉強や仕事をさせられても成長はしません。この三人から「私のへまで試合に負けたらどうしよう」という心理的不安を取り除いてやり、ゆとりをもって試合に出すことができるという意味で岩永姉妹と金床の加入は大きいのです。

清水はチーム内でもっとも動きが遅い選手です。でもバスケットは他の誰よりも理解しています。ですから、谷川や岩永姉妹を捕まえるのに相手がムキになるとその間隙を縫ってちゃんと自分に見合った仕事をしてくれると私は思っています。そして、チームがそのように安定した状態で二宮・林田・立川を試合に出すことができれば試合を通して彼女たちもまた成長していつてくれると思います。これから日が経つてくると

また修正するかもしれませんが、とりあえずそのような構想でチーム創りを推し進めていこうと思います。

【結果報告】

「もたもたした試合をさせてしまったのは私の責任です」などと優等生の答弁はしません。「全員プチ殺してしまいたい」と今でも思っています。その理由は昨年一〇月から半年もかけて攻撃の仕掛け方（特にゾーンプレスの破り方）を教えてきたのに、長崎商業にゾーンプレスを仕掛けられると選手たちの目は泳いでいるし足は震えて浮き足立っているし、実に無様な試合をしてしまったからです。

話を少し前に戻します。新二年生は清水を除いて「よくもまあこんなに揃ったものだ」というくらい試合の様相が分からないし理解するのに時間がかかる選手が集まりました。わからないという原因はいくつかのタイプに分かれます。谷川と二宮はやるうと思ったこと以外はまったく見えなくなる視野狭窄タイプ。林田はイメージを取り込むのが苦手な左脳優先タイプ。立川は何か起こりそうになると緊張して金縛り状態になる強迫神経症タイプ。成井は気がついたら無意識に行動してしまっている衝動行動タイプ。

試合の様相といっても、相手の心理を読むとか試合の流れを把握するなどの高度な理解力を私は彼女らに要求しません。もっと単純な局面の移り変わり、言い換えればリズム・間（時間の間と距離の間）・はずす・詰める・詰まるなどということばで表現される基本的な動きを少しだけでいいからわかってくれればいいのです。

それで私は、半年間に渡ってオールコート三対四というゾーンプレス崩し用の練習メニューを毎日日々教え込んできました。この練習はゾーンプレスをうまく攻められるようになるというだけでなく、攻撃のあらゆる場面に応用できる練習です。即ち、「動いて 崩して ついて 攻める」という攻撃のもっとも基本的なイメージを選手のアタマにインプットさせる内容が随所に現れる練習なのです。時には練習時間の全てをこのメニューだけで使ってしまった日もあります。

半年教え込んで、充分とは言えませんが県内ではオタオタすることはないだろうという程度までは到達したと思い、最近では他のメニューに割く時間も増えてきていました。しかし現状はひどいものでした。この選手たちには半年で理解させるのは無理だというのであればまた半年がんばります。それでも足りないというのであれば長崎夢総体までこればかりやります。とことんやります。選手の顔に「もう大丈夫です」という表情が現れるまで。

二 魔物

平成十四年六月 県下高校総体 三位 スタメン 谷川 二宮 清水 岩永姉 岩永妹

【案内文書】

四月中旬の県春季選手権で長崎商業のゾーンプレスにあたふたした後遺症は、4月下旬の福岡佐賀遠征まで引きずっていました。というより練習をやればやるほど悪くなり、クレインズがはばたく空には果てしなく暗雲が広がっていくという状況でした。そこで私は四月三〇日から五月二日までの三日間練習を休み、倉敷遠征のために充電することにしました。

ところが倉敷遠征ではいきなり初戦から三連敗。しかし私は初戦の城北戦のあと、「この遠征では全部負けでもいい。負けやミスを気にせずヤレ」と選手に言いました。その理由は、予想以上に回復が長引いた岩永妹の足首捻挫がようやく回復し、まだ強く踏ん張れないものの試合に出せるようになったこと、春季選手権の報告書で強迫神経症タイプと評した立川の気持ちがおんの少しだけどプラス方向に向きを変えたのではないかと感じられたからです。

春季選手権でも福岡佐賀遠征でも、勝ってもまったく先が見えない状況にイライラしていた私の中に、倉敷遠征では「コマが揃った」「鬨いに背を向けるヤツがいなくなった」という安堵感から「さあ、これからだ」という気持ちが湧いてきて、怒りや焦りをまったく感じないで采配を振るうことができました。

倉敷では他校の監督から「先生、今回は静かですね」と言われました。「来年に焦点を置いてるんですか」とも言われました。私の心配ぶりから「どんなことをしてでも勝ちに行く」という気迫が感じられなかったのでしょう。

「岩永姉妹をコートに置いた場合どこを修正しなければならぬか」

「立川が今のプレイをどんな気持ちでやったか」

そんなことばかりが頭の中を占領しているので、選手にアドバイスを送るよりも「さあ、お前ここをどうやって切り抜ける？」という個人観察優先になってしまいました。勝負を度外視していたわけでも、来年に焦点を置いていたわけでもありません。

で、観察とイメージングの繰り返しの結果どうなったかというところ、最終日に「谷川をこんなふうに使えばチームの得点力が安定するんだ」というアイデアが湧き、午後の二試合はそれを試して帰ってきました。それをもっとしつかり定着させるべく一分でも時間が惜しいという気持ちで今練習に取り組んでいます。日によつてできればえがまちまちで、「これで大丈夫」という域にはなかなか達しませんが、総体までにはもう少し整えたいと思います。

林田は倉敷遠征ではほとんど使わず今も休ませています。左の腸腰筋（骨盤内体幹屈筋）を傷めたからです。彼女は追い込まれ過ぎてパニック状態だったのでここで少し休養を与えてもいいと思っています。金床は倉敷遠征でひとりだけ私から徹底的にいじめられました。その結果がどう出るか、これも興味あるところです。

【結果報告】

案内文書は五月十五日付けでした。その後二五日と二六日の二日間佐賀に遠征しました。九州女子に二敗し佐賀清和に一勝一敗でした。案内文書で「倉敷遠征の最終日に 谷川をこんなふうに使えばチームの得点力が安定するんだ」というアイデアが湧いた」と書きましたが、それは谷川のインサイドプレイを組織プレイの中に織り込むというアイデアでした。しかしこの遠征では谷川も周囲の選手たちも、谷川のインサイドプレイにばかりこだわりすぎてダメだったので、アウトサイドとインサイドの組合せを繰り返し教え込んでこの大会に臨みました。

それと並行してこの一ヶ月間、マンツーマンディフェンスの練習にも時間を割きました。しかし訓練した成果は総体の会場に潜む魔物に翻弄されて跡形もなく消えてなくなり、これを抛り所に：というものが何もないまま決勝リーグの采配を振るわなければならなくなりました。特に純心戦の後半は制御不能になり、手の施しようがありませんでした。

昭和六〇年八月十二日。羽田発大阪行きジャンボジェット機が群馬県多野郡上野村の御巢鷹山に墜落して乗客乗員五二〇人が亡くなりました。垂直尾翼の一部を破損して旋回や蛇行を繰り返しながら、長い時間大空をさまよった挙句の墜落でした。機長はおそらく、操縦不能になった飛行機をなんとかして海か平らな陸地へ不時着させられないかと思ひ、墜落間際まであらゆる手段を試みたと思います。それでもどうにもならなかったのしょう。

なすすべなく最後の瞬間を迎えなければならなかった機長の気持ちは「無念」だったと思います。私の今大会後の思いも「無念」でした。でも、同じ無念でも機長は亡くなり私は生き残っています。生き残っているならばまた飛び立っています。今日から国体とウィンターカップに向けて子育てを始めます。

追伸

長崎ゆめ総体の年に私は六一歳になります。鶴鳴教員の定年は六〇歳ですが私は長崎ゆめ総体まで現状のまま続けます。それ以後の私の去就のことで巷では噂が飛び交っているようですから真実を申し上げます。長崎ゆめ総体以後も私の指導の下に全国の上位を狙ったチーム創りは継続します。ですから、私の責任の下にこれからも選手募集活動は続けていきます。

現二年生にはシューティングフワードが、現一年生には優秀なガード陣がいますので次の代ではパワー

フォワードとビッグセンターを獲得して全国上位を狙いたいと思います。そのため、八月上旬にビッグセンターを捜しにアメリカに飛びます。

【タイプ】

四月の春季選手権の報告書に

谷川と二宮はやるうと思つたこと以外はまったく見えなくなる視野狭窄タイプ。

林田はイメージを取り込むのが苦手な左脳優先タイプ。

立川は何か起こりそうになると緊張して金縛り状態になる強迫神経症タイプ。

成井は気がついたら無意識に行動してしまっている衝動行動タイプ。

と書いたが、これはここに登場した選手たちだけがそういう弱点を持っていたと言つてゐるのではない。ほとんどの人間は何らかの弱点を持っている。そしてそれは、その人物が生きるか死ぬかの局面や「さあどうする」と追い込まれる場面になると表に現れる。大半の人間は人生の中でそんなに追い込まれる場面には遭遇しないので自分自身のそういう一面には気がつかない。

しかし、チャンピオンを目指す部活動では毎日が「さあどうする」の連続だから、いやでも自分の内面に潜む弱点と対面しなければならぬ。私が言う魔物とは自分の中に潜む弱点のことである。その弱点は人によって程度の差がある。鶴鳴の選手たちの中では、弱点のレベルのステージ三は清水ひとりだけであとはステージ四とか五だつたからチーム内に混乱や不安が広がつていったのである。

これがステージ三が三人ぐらいだとステージ四や五も訓練を重ねながらやがてステージ三に近づきステージ三だつた者はステージ二になり組織が安定してくるのである。ちなみに、何の訓練もしないで最初からステージ二の人間はほとんどいないし、ステージ一の人間など皆無に等しい。ステージ〇という人間がいるとするならばそれは人生の達人か神である。

自分の内面に潜む弱点についてもう少し噛み砕いて説明しよう。私がここでタイプと称して分類したのだけが人の持つ弱点ではない。

なまけものである

卑怯者である

粘り強さが足りない

注意力が足りない

集中力が足りない

などなど、ピンからキリまでいろいろある。そしてそんなものは誰でも持っている。ここに挙げた以外にも弱点と呼べるものは他にもたくさんあると思うが、弱点の定義を私は、人間の進歩や成長を妨げる要因となるものすべてだと思つている。

自分の内面に潜む弱点に対峙した時、人は何らかの行動を起こす。それは三つのタイプに分かれる。

避けて通ろうとする。

退治しようとする。

弱点と折り合いを付けて同居しようとする。

チャンピオンを狙う部活動の選手は、など言語道断。が最も理想的だがそれだけでと生きていることが苦しくなる。だから、も捨ててはならない。難病の患者の例を挙げる。私の教え子に（バスケット部の教え子ではない）、おとなになつてからネフローゼ症候群を発症した子がいる。彼女は短大を卒業して中学校の教師になつた。当初彼女は病気になることをとても悲観し、教師を続けることができるかどうか、結婚して子供を産めるかどうかとても心配していた。しかし数年後彼女は結婚して子供を二人産み、今も（二〇一三年現在）中学校の体育教師を続けている。二児の母になつた彼女に会つた時ネフローゼのことを聞いたが本人は「ステロイド剤の調節をうまくやりさえすれば済むことですから」とケロッツとして言つた。彼女はネフローゼを同居人と認めたのである。

さてこの時の選手たちが当時それぞれ のどれを選んだかという答えはない。初めて見る自分に翻弄されてどう対処したらいいかわからず、ただただ戸惑う日々を送っていたというのが事実であろう。

訓練が人を変える。それを何度も私は見てきたが、コートに一步足を踏み入れるのさえ怖がっていた林田は後にU十八日本代表に選ばれて海外遠征をしたし、その後も関東の大学でプレイし、その後WJBLでもプレイをした。二宮も林田と同じく関東の大学でプレイし、卒業後はWJBLでプレイを続けている(二〇一三年現在)。

三 ジャトウ(一)

県高校総体の結果報告文書に「八月上旬にビッグセンターを捜しにアメリカに飛びます」と書いたがそのことについて述べる。この話は平成七年までさかのぼる。平成七年の夏、鶴鳴はアメリカ遠征をした。お世話をしていたいたのは長崎在住のアメリカ人GUY・HEALY(ガイ・ヒーリー)氏である。彼は長崎に長く住んでいて国際交流(語学やスポーツ)を企画運営する仕事をしている。当初彼は大胆にもノースカロライナ大学のディーン・スミス氏のクリニックを鶴鳴に受けさせようとして動き始めた。

当然それは無理だ。ヒーリー氏はいろいろ交渉していくうちに、アメリカのバスケット関係者から「日本の女子チームがアメリカに勉強に来るのなら女子のコーチですばらしい人がいるから彼女に頼んでみたら?」と言われ、そのコーチに何の面識もないのにヒーリー氏はアプローチした。彼女の名前はキャシー・ベネット。ヒーリー氏の依頼を彼女は承諾し、鶴鳴はその年の八月にウイスコンシン州のオシユコシユに遠征することになった。その前後の経緯については「大野慎子物語」に記してあるので省略する。

大野慎子はそれがきっかけで高校卒業後アメリカの大学でプレイすることになったが、その後もずっとキャシーは鶴鳴にいい選手が出たら寄越してくれと言いつづけていたが、そればかりではなくアメリカの中学生でいいのを見つけたら紹介するから山崎コーチが日本に連れて行って訓練し、卒業したら私の大学に寄越し、欲しいとも言いつづけていた。アメリカの大学のコーチというのはいつもリクルートで苦しんでいるのだ。

当初私はその話を真剣に聞いていなかった。だって、バスケットの本場アメリカからわざわざ日本にバスケットを学びに来る選手がいるわけがないと思っていたからだ。しかし私は平成十四年の夏その話を真剣に考え始めた。翌年長崎インターハイが開催されるが県内にはビッグセンターがない。国内を探せばいるけれども日本の端っこの田舎町までは来てくれない。地元インターハイで上位を狙わなければならないならばビッグセンターを外国から呼ぶしかないと思いついた。

外国から選手を取ってまで「もう一度全国優勝したい」という私的な思いはまったくなかったが、インターハイが長崎で開催されるので、地元で開催されるならばなんとしてもファイナルには残らなければならぬというプレッシャーが私を動かした。

そこでキャシーに「あの話真剣に進めてくれ」と頼んだ。それからしばしば情報は入るのだが、ほとんどが「短期留学ならいいけど三年間というのは無理だ」という話ばかりだ。それでは公式試合には出せない。そんな話を誰から聞きつけたのか当時OSSGのヘッドコーチをしていた中村和雄氏から電話がかかった。

「お前、アメリカから選手とろうとしてるんだって?」

「ええ、そうですね」

「本気で?」

「本気でよ」

「おれんとこの外人はなあ、アメリカの大学を出てるんだけどセネガル人なんだ。そいつが、セネガルには外国留学希望の子はたくさんいますよ、って言うんだ。どうだ、アメリカでなきゃだめか?」

「いいえ、そんなことありません。ただ、アメリカにしか伝手がなかっただけで」

「俺、動いていいか？」

「いいかじゃなくて、そんな伝手があるんならこっちからお願いしたいですよ」

「わかった、じゃ動いてみる。でもアメリカとダブったらどうする？」

「その時は二人になってもかまいませんよ」

ということでセネガルが浮上してきたのである。

ジャトウの話はこれからしばしば登場するが今はここまでとしておく。

平成十四年八月 九州国体 予選リーグ三位 スタメン 山下純 関田純 木村純 立川鶴 出岐純

【案内文書】

昨年の九州国体は、六月の九州高校総体で優勝した中村学園（福岡）と準優勝した鶴鳴（長崎）がシードされ、両者ともにそれぞれのブロックで優勝して本国体出場を果たしました。九州高校総体で準優勝だった鶴鳴主体の長崎は一位決定戦で中村学園主体の福岡に勝って九州第一代表となり、本国体は第二シードで結果は三位。熊本国府はインターハイ準優勝ながらも九州国体予選リーグで福岡に負け、本国体出場は成りませんでした。本主に高校生のスポーツ大会は残酷です。それが勝負の世界の厳しさだよと言えばそれまでですが、高校スポーツは「負けたから引退を一年延期します」ということが出来ないのが残酷なのです。

さて、今年は純心が九州高校総体で四位だったので長崎は第四シード。福岡のパートナーです。九州高校総体終了時点で九州国体は福岡のブロックとわかっていたので福岡対策ばかりを練習してきました。福岡対策というのは中村学園の長身者のデیفュンス対策です。七月二〇日から二四日までの山口錬成会に福岡も参加したので、手の内をすべて見せることなく少しずつ試しながら四試合してきました。

結果は一勝三敗でしたが手応えは感じました。主体となる中村学園はご存知のようにインターハイ準優勝のチームですが、相手がベストメンバーであつても部分的に或いはある時間帯はこちらが主導権を取ってプレイする場面が必ずありますので臆せず戦いを挑みます。

メンバー表を見ておわかりのように、ポイントゲッターの谷川が消えて二宮に替わっています。谷川は七月の始め風邪がもとで髄膜炎疑い（結果的に髄膜炎ではなかった）になり、入院治療後リハビリを続けていましたが回復が遅れ、やむなく代役二宮にバトンタッチせざるを得なくなりました。髄膜炎と分かった時点で回復した場合と回復しなかった場合の二本立てで練習を進めてきましたので、代役の二宮も心身ともに充分準備はできています。

【結果報告】

- 平成 元年（一九八九）北海道（鶴鳴＋補強）順位なし
- 平成〇二年（一九九〇）福岡（鶴鳴＋補強）順位なし
- 平成〇三年（一九九一）石川（鶴鳴＋補強）三位
- 平成〇四年（一九九二）山形（純心＋補強）五位
- 平成〇五年（一九九三）徳島（純心＋補強）順位なし
- 平成〇六年（一九九四）愛知（純心＋補強）三位
- 平成〇七年（一九九五）福島（鶴鳴＋補強）二位
- 平成〇八年（一九九六）広島（鶴鳴＋補強）三位
- 平成〇九年（一九九七）大阪（鶴鳴＋補強）出場権取れず
- 平成一〇年（一九九八）岩手（純心＋補強）出場権取れず
- 平成十一年（一九九九）熊本（純心＋補強）順位なし（府県対抗）
- 平成十二年（二〇〇〇）富山（鶴鳴＋補強）二位
- 平成十三年（二〇〇一）宮城（鶴鳴＋補強）三位
- 平成十四年（二〇〇二）高知（純商鶴合同）出場権取れず

平成になってから少年女子が国体に出られなかったのはわずか二回だけ。しかも、出場権を得て本国体に出場した十一回のうち順位なしは四回だけ。そんな輝かしい少年女子の実績に三回目の「出場権取れず」の刻印を刻むことになりました。断腸の思いです。

指導者として駆けだし頃は国体は邪魔で仕方がない存在でしかありませんでした。インターハイやウィンターカップのタイトルを狙って活動しているのに、国体の強化事業が間に入ってくるのはチーム強化を足踏みさせる以外の何物でもないとしか考えられなかったからです。エゴのかたまりでした。

ところが歳月を重ね、物事を客観的に見られるようになる。と国体の重要性が本当にわかるようになりまし。インターハイやウィンターカップは身内だけの喜びです。しかし国体は多くの人々のさまざまな思いが込められた大会で、ほんものの「和」を必要とする大会なのです。そういうことがわかるようになってから私は「鶴鳴がどんなに強くなっても単独チームで国体には出場しない。必ず他チームからも補強を入れる」という考えを貫いてきました。

今年は特に、鶴鳴が下級生主体で未熟さ満載のチームなので純心・長崎商業・鶴鳴の三者合同の選抜メンバーでチーム編成をしました。練習や遠征も例年より回数を増やし、万全の準備をして九州国体に臨みましたが、直前になって主砲谷川の病欠場に始まり、センター清水の古傷の再発（初戦の佐賀戦で打撲して二日目はまったく出られず）というアクシデントがあり、本体壊滅という状態で戦わなければならなくなりました。

準備してきた戦術の大幅変更を余儀なくされ、急場しのぎの策戦を使わなければならなくなったにも関わらず。私の意図をよく汲み取って、持てる力を精一杯發揮してくれた純心と長崎商業の選手たちには本当に感謝します。「無念！」です。本当に無念ですが、こんな試練は何度も味わいました。へこたれずにがんばります。

平成十四年九月 ウィンターカップ予選 三位 スタメン 林田 立川 二宮 清水 岩永姉

【案内文書】

谷川 雅 よくなったりぶり返したりでまだリハビリの域を出ません。

清水さつき 半月板損傷で結局は手術をしなければなりません。この試合まで出してその後手術の日取りを決めます。清水の膝は生まれつき半月板の形が丸形（デイスコイド）なので傷つきやすく、中学時代から少しずつ傷めてきたのが溜まって今症状が出たのです。運命です。仕方ありません。

岩永かほり 林田と同じく腸腰筋（骨盤内にある筋肉で、ダッシュの時のモモ挙げに使う筋）を傷めて長期療養中です。ぶつつけ本番で試合には出しますが試合後また休養しなければなりません。

アウトサイドの中心選手谷川とインサイドの中心選手清水が戦線離脱で、実働メンバーが少ない鶴鳴はかなりの痛手を受け、踏んだり蹴ったり状態ですが皆既日食ではありません。日の当たる場所はちゃんとあります。

八月四日の午後から七日の午前中まで九州女子高校を招待して強化合宿をしました。初日は惨憺たる出来で相手の九州女子には気の毒でした。が、翌五日は少し動きがよくなりました。そして六日には信じられないほど動きがよくなり、しっかりした試合ができるようになりました。

特に立川は本当に彼女なのかと疑いたくなるような動きと表情になりました。それは、九州国体に向けての国体チームの練習でも変わりませんでした。さらに、九月七日と八日にまた福岡に遠征をしましたがこの時も立川は変わりませんでした。入学以来一年半、私から罵倒されなかった日は一度もない立川が変わったのです。八月五日以降、元の立川に戻られるのがこわくてビクビクしながらコートに立ち、「今日も大丈夫だ」と思ってホツとする。そんな毎日を送っています。「夢ならば醒めないで欲しい」それが今の私の心境です。

加えて、立川には少し出遅れましたが林田の動きまでよくなってきました。四月二三日付けの春季選手権大会の報告書に、林田は左脳優先タイプ、立川は強迫神経症タイプで、二人ともそれをなかなか抜け出ることができないと書いたのをご記憶の方もいらっしゃると思います。まだその要素が時々現れる場面がありますが、それにも動揺せずこの二人はよくなった自分を維持しています。今度の大会は改訂版立川と改訂版林田を見ていただく楽しみが出てきました。

このチームは一昨年リクルートが決まった時に平成三年（インターハイ優勝）に匹敵するかそれ以上のリクルートができたと言って大喜びしました。ところが一年経って彼女らに主役が回ってくると個人個人の弱点が浮き彫りになり、それが次第次第に大きくなってゆめ総体どころか県大会レベルを維持できるかどうか心配する日が続きました。しかし、それもおしまいにできるかもしれません。

【結果報告】

林田は改訂版とまではいかなくとも、そこそこ仕事をしてくれました。立川は改訂版どころか初版に戻ってしまいました。

本当に彼女なのかと疑いたくなるような動きと表情になりました。それは、九州国体に向けての国体チームの練習でも変わりませんでした。さらに、九月七日と八日にまた福岡遠征をしましたが、この時も立川は変わりませんでした。入学以来一年半、私から罵倒されなかった日は一日たりとてなかった立川が変わったのです。八月五日以降、元の立川に戻られるのが怖くてビクビクしながらコートに立ち、「今日も大丈夫だ！」そう思っただけとほっとする。そんな毎日を送っています。

これは、ウィンターカップ予選の案内文書に書いた文章です。書いた日は九月十七日です。それからウィンターカップ予選までは一〇日余りありましたが、その一〇日間立川は日に日に成長するということを感じていました。ところが、本番の長崎商業戦ではまったく精彩を欠き、とうとう最後まで昔の立川で終わってしまいました。しかし、結果はこうなってしまうましたが、八月五日から九月二十七日まで停滞することなく成長してきた立川はホンモノだと私は思っています。決してまぐれではないと思っています。来年はきっと爆発してくれるでしょう。

タイムアウトやハーフタイムで「お前、せつかく生まれ変わったのにこのまま終わるのは惨めだろう」と再三ハツパをかけたが、そのハツパは前述の文中にあるような罵倒ではありません。たぶん、たとえ今後出来が悪い試合や練習があつたとしても私が彼女を罵倒することはもうないと思います。

これで、インターハイ・国体・ウィンターカップとすべての全国大会出場権を逃してしまいました。が気持ちには静かです。落胆も失望もしていません。清水はこの後手術（半月板）をします。岩永姉もまだしばらくリハビリ（腸腰筋損傷）が必要です。全員元気に揃って練習できるまでにはまだしばらくかかりますが、その間林田と立川を点が取れる選手に育て上げることと、二宮と岩永姉にゲームを組み立てる力を付けさせることを重点項目とし、一〇ヶ月後の長崎ゆめ総体目指して準備を進めていきます。

四 デング熱騒動

【谷川雅と原田五月】

七月上旬、谷川雅は片淵町にある済生会病院に入院した。ずっと体調不良が続いていたので精密検査をするためだった。見舞いに行った時谷川は車椅子で移動していた。うまく歩けないというのだ。熱はさほど高くなかったが、うまく歩けないというので病院側は風邪からの髄膜炎を起こした可能性があるかとみてその検査をした。しかしそれは陰性だった。

済生会病院側はさらに詳しい検査をしてもらうために長崎市民病院に診察を依頼した。市民病院には私が付き添って行った。谷川の診察が終わったあと私だけ医師から呼ばれて診察室に入った。医師はカルテを示しながら私に説明する。

医師「筋電図には何の異常もないんですよ」
山崎「やっぱり」

現実には谷川は老人のようにのろのろとしか歩けないので市民病院では神経系に何らかの異常が障害があるのかもしれないと思って検査したのだ。結果は異常なし。医師と目が合ったとたん、私は彼女のこれまでの経緯と現在の状態をすべて飲み込めた。医師も自分が伝えたいことを私がすべて飲み込んだことを感じ取っていた。

心のダメージなのだ。私は医師と話をしながら原田五月を思い出していた。谷川も原田も中学時代までは神童といわれるほどの子で挫折感など味わったことがない。それが、高校に入学するとやることなすことうまくいかないのだ。当然心に傷を負う。

前に、自分の内面に潜む弱点に対峙した時人は何らかの行動を起こす。それは三つのタイプに分かれる。避けて通ろうとする。

退治しようとする。

弱点と折り合いを付けて同居しようとする。

と述べたが、原田は時間がかかったものの解決方法を選んだ。しかし、を選ぶ前に高校時代に二回脱走したし（暴力の絶えなかった私がその理由の大半だが）、卒業後実業団一年目にも脱走した。計三回である。一方谷川は、自分の人生の中で自分のやることでうまくいかないことがあるなど絶対に認めたくない性格だし、ましてや同じ練習をしていて他人が自分よりうまくなくていくなんで谷川ワールドの中ではあり得ないことなのだ。

しかも、谷川にとって解決法はその項目すらないのである。そんな谷川にとって車椅子でしか歩行ができないようになるほどの精神的ダメージを与えたのはおそらく、思ってもいなかった県高校総体の敗北がもっとも大きい要素であろう。しかも、個人的にも谷川は散々な出来だった。傷は深い。

最終的に、原田は全日本代表のキャプテンとして活躍するようになったし、谷川は翌年のウィンターカップではチーム成績三位、個人ではベスト五に選ばれ、神童復活で高校でのバスケット生活を終えることができたが、二人ともそこに行き着くまでにはそれまで味わったことのない地獄の苦しみを通り抜けなければならなかったのである

話を長崎市民病院に戻そう。

私は市民病院受診後「これは長くかかるぞ」と思った。谷川の心の傷を治すためのよいクスリなどない。本人が日々暮らしていく生活の中で、自分を客観的に見られるようになるまで周囲の者が彼女をよく理解して関わってやるしか方法がないのである。

彼女は五島出身の寮生なので、済生会病院にも市民病院にも私が親代わりとして付き添っていった。夏休み中は実家の五島で自宅療養をして二学期からまた寮に戻って学校生活をするようになるが、寮生活ではやはり私が親代わりだし他の寮生が姉妹役をしてやらなければならない。

谷川は、二学期になって復帰してから練習参加はしないものの毎日体育館には顔を出し、遠征にもみんなと一緒に連れて行った。そういう生活の中で私がつとも気を使ったのが、谷川が居るところで「あいつは巧くなった」と、他の選手を誉めることばを絶対使わないようにすることだった。それは他の選手全員にも伝えた。

しかし、九月の敬老の日を含んだ三連休に九州女子高校に遠征した時に谷川はまた体調不良になり、初日の午後から合宿が終わるまでずっと宿舍の部屋で休んでいた。理由は分かっている。この合宿ではみんなの動きがいつもよりよかったからだ。谷川にとってはみんながもたもたしてくれる方が自分の存在が重要になるので心の傷は癒されるが、みんながすいすい動くのを目の当たりにすると自分の存在に不安を覚えてくるのだ。チームは強くしたいし谷川の心の傷も癒してやりたい。しかしその両立がむずかしい。長いコーチ生活で苦しいことや辛いことはいやというほど経験しているが、この時期の私は心身ともに疲弊していた。

【 Dengue 熱騒動 】

九月十七日(火) 左鼠径部リンパ節が腫れていることに気付く。左足に化膿しているケガや腫れ物はない。

二三日(月) だんだん大きくなるので気になり、懇意にしている整形外科医に電話で相談する。

山崎「気になるので直接外科医または内科医を受診した方がいいでしょうか」

医師「とりあえず診させて貰いましょう」

二四日(火) 同院受診。

「小さな傷でもリンパ節が大きく腫れることはある。お尻の小さなできものが原因かな？」
抗生物質を十二錠もらって帰る。そのカプセルは大きかったので一回一錠と思って服用していたが実は一回に二錠ずつ飲むクスリだった。

二七日(金) 夕方七時頃から震えを伴う高熱(三九度四分)が出る。夜中の二時頃震えは治まる。

二八日(土) 朝、熱は三七度八分まで下がっていたが鼻出血と歯茎出血有り。ウインターカップ予選の指揮を執る。午後二時同院受診。昨夜の高熱を報告する。その時、抗生物質一回の分の個数を間違っていたことを指摘される。猫ひっかき病か Dengue 熱疑いを尋ねるが院長は笑って答え無し。しかし、月曜日に念のため血液検査をすることになった。臀部に抗生物質を注射される。この時、もし今夜三八度を超える熱が出たら明日(日曜日)また注射を打ちに来なさいと言われる。夕方六時半から再び高熱(三九度八分)。震えは来ないが激しい頭痛と節々の痛みで眠れない。

二九日(日) 一晚中熱は下がらず、朝六時の検温では三九度四分だった。朝八時に同院に出かけ、昨日の抗生物質を臀部に注射してもらう。選手は三根氏にマイクロバスで送ってもらい、私は直前まで安静にしている三菱体育館に出かける。会場で平静を装うのが苦しかった。この日から、院長の許可を得て市販の解熱剤を使用。午後は三七度台を行ったり来たり。午後三時に院長から電話がかかり、夕方もう一度臀部に注射を打ちに来なさいと言われる。夕方六時前に受診。その後夕方七時過ぎから検温の度に少しずつ上がり、夜一〇時には三八度五分になったので院長から渡された解熱鎮痛剤を二錠飲んで寝る。夜中に汗びっしょりになっているのに気付き、二回替えた。半分寝ぼけていたので検温はしていない。

三〇日(月) 朝六時の検温では三六度六分まで下がっていた。しかし身体はだるく、頭の芯に鈍痛があり重い。報告事項があるので通常通り出勤。一校時、体育の授業の指示はするも以後は教室で静養。鼻腔粘膜の出血は消失。夕方六時過ぎると決まって熱が高くなり、検温の度に徐々上がる。しかし今夜は夕方六時半に飲んだ解熱剤の効き目か、就寝前は三七度一分までしか上がらなかった。私は学校で猫を飼っているから猫ひっかき病も疑われるし、人一倍蚊に刺されやすい体質でもあり、症状が Dengue 熱そのものなので(ネットイシマカは亜熱帯以北には生息していないが) Dengue 熱を疑いたくなるが、Dengue 熱が単発で私だけに発症するというのも不自然。が、もし万一といことがあれば学校の生徒にも警告しなければならぬのでこの日血液検査をする。白血球八八〇〇、血小板十三万個、血小板は下限すれすれの値であるが異常なしの範囲。Dengue 熱の疑いは晴れる。

〇一日(火) 創立記念日だが静養させてもらう。午前中はずっと三六度台。午後二時の検温で三七度三分まで上がる。慌てて解熱剤を飲む。平熱に戻り以後上がらない。しかし倦怠感と頭の鈍痛は続く。

【新キャプテン指名】

現二年生は翌年の長崎ゆめ総体の時の三年生である。それを見越してリクルート活動をした。

谷川 雅一六四cm（島原半島の深江中学校）
清水 さつき一七七cm（島原半島の吾妻中学校）
立川 美 礼一七八cm（諫早市北諫早中学校）
林田 明 佳一七二cm（大村市桜が原中学校）
成井 可 奈一六四cm（茨城御所ヶ丘中学校）成井千夏の妹自主志願
二宮 可南子一六二cm（山梨甲西中学校）自主志願

さて、ウィンターカップ予選で負けたので、事実上チームは二年生主体であったが一応三年生は引退というかたちになり九月二八日から新体制になる。だからキャプテンは三年生の進藤から二年生の誰かに引き継がなければならない。私はウィンターカップ予選後すぐ新キャプテンを立川に指名した（一時期林田にしたがすぐ戻した）。キャプテンを決める時は選手の選挙によらず、トップダウンで私が指名する。大会社と同じだ。指名に当たっては日頃から選手をよく観察しているし、それと悟られないようにしながらプレイには現れない人物評に関して選手たちから情報を収集している。

プレイ上から見れば谷川がキャプテンとなっても誰も異を唱えないだろう。人物的には清水でも問題なからう。しかし私は立川を指名した。それには理由がある。長崎ゆめ総体の女子バスケットボール競技会場は諫早市である。立川は競技会場である諫早市で生まれ、しかもインターハイの時に高校三年生になり、そしてバスケットボール競技の選手である。これは運命だ。そんな運命の下に生まれてきた子に、生まれ故郷の檜舞台で選手宣誓をさせる。これ以上の理由付けは要らないだろう。

ところがこのキャプテン指名にAさんから大クレームが付いた。Aさんはウィンターカップ予選後「* # ♪！」と自分の思いをありったけ私にぶつけてきた。そのクレームは聞くに値しない個人の勝手な思いだったので私は「 @なのか？」と返した。Aさんは「そうです！」と言った。私はそれ以上の問答がバカらしかったのでニヤツと笑っておしまいにした。

立川のために弁護しておくが、Aさんのクレームは立川がキャプテンに不適格だと言いたかったのではない。また、Aさんの身分は、協会関係者なのか、身内なのか、部外者なのか、卒業生なのか、職場の職員なのか上司なのかなど、それもAさんの名譽のために明かさない。

ちなみにその後Aさんとは何度も顔を合わせるが何事もない。長い間コーチをやっていると、一方的な見方しかしないクレームや、身びいき過ぎるための過干渉（鼻肩の引き倒し）などいろいろある。しかし、そんなことも含めて的確に対処していくのはコーチとしての重要な任務のひとつである。

五 財政

私は鶴鳴でコーチを務めた三五年間、選手から部費や遠征費を徴収したことがない。それは、私自身の生い立ちに関係がある。私たち家族は満州からの引き揚げ者である。このことは「チームを創る（改訂版）第一章・一〇・鶴鳴・母」に詳しく書いているが、引き上げ後すぐ父が死に、母が身につけていた洋裁の技術で家計を支えていたので私が大学を卒業するまで私たちは貧乏だった。

だから、高校に入って部活動を始めた私は母に「バスケットシューズを買ってくれ」とは言えず、先輩のお古を買ってそれが潰れるまで履いて練習していた。私が部活動の指導者となってから三五年間「選手たちの中には俺と同じ思いをしている選手がいるかもしれない。そんな選手たちにお金のことでは心配はさせたくない」という気持ちはずっとあったのである。

生い立ちということばが出てきたので私の高校時代までのことについて話そう。

私は小学校の一年生から中学校の一年生の一学期までを佐賀県の北方町という田舎で過ごした。私は昭和十七年五月生まれだが、学年は小学校一年生の時からずっと昭和十八年生まれの人たちと同級生である。引き上げの時の栄養不良が影響したのか私は身体が弱く、しょっちゅう病気をして学校を休んだ。小学校一年

生の時あまりにも欠席数が多かったので、学校側と母が相談して「このままでは二年生に進級しても勉強についていけないので一年休学してもう一度一年生からやり直しましょう」ということになった。

もう一度一年生からやり直したがやっぱり休みは多い。進級する毎に休みは減ったものの他の生徒に比べると休みが多い子に変わりはなかった。ところが五年生の頃から身体が丈夫になったのか休みがガタンと減った。そして六年生の時には皆勤賞を貰った。身体が丈夫になるとそれまで抑え込んでいた「思い切り運動をしたい」という気持ちが爆発して昼休みになると真つ先にグラウンドに出て暴れた。暴れたと言っても、私が小学生だった頃のスポーツといえば野球か相撲しかない。私は少ない人数でもすぐやれる相撲を選んだ。

中学校に入るとスポーツ好きの子は野球部か相撲部に入る。私の小学校の時の相撲のライバルであった野口は野球部に入った。私は相撲部に入った。一年生の六月、県中総体が武雄市で開催されたが、一年生の中からは私だけ上級生に混じって遠征に連れて行って貰った。野球部の野口は補欠のままだった。

その頃兄はすでに三菱重工に務めており、母も長崎の東洋美装店の職員としての仕事に就いたので私も一年生の一学期終了後長崎に転校することになった。音無町の市営住宅を借りて住むことになったので、私の転校先は西浦上中学校になった。私は転校してしばらくすると仲間を誘って相撲部を立ち上げた。もちろん当時の西浦上中に相撲部はなかった。

私は音楽の原先生に顧問になって貰うようお願いして承諾を得た。場所は現在の北校舎の端っこで千歳町との境界線の石垣下の中庭と決め、そこに近くの民家からワラを大量に貰ってきてそれを縄で硬く巻いて土俵を作った。当時の部活動なんてみんな大して熱心ではないので日曜日に練習する部などない。そんな中私は仲間を説き伏せて相撲部は日曜日も練習するようにした。

私が二年生になった時、西浦上中の相撲部はまだ立ち上げて間もないので弱かったが私は長崎市中総体の個人戦二年生の部で優勝候補の谷口選手（桜馬場中）を破って優勝し、県大会に出場した。県大会は大村公園の相撲場で行われたがそこでは五島代表の私より身体が小さい選手に準決勝で負けた。私は相撲で負けたのではなく食い物で負けたんだと思った。あの選手はきつと小さいころから鰯をたくさん食べ、筋肉も骨も丈夫に育つたに違いないと今でも思っている。

三年生の長崎市中総体は桜馬場中学校の土俵で行われたが、この時は背中に直径一〇cmぐらいある大きなできものが出来て膿んでいて力が入らず、淵中学校の安永選手に準決勝で負けた。

私は三年生の途中から「高校生になったらチームスポーツをやるう。相撲はもういい」と思っていた。団体競技はみんなで喜びみんなで励まし合っている。相撲は個人スポーツなのでそんな場面がない。だからみんなで喜び合っている団体競技がうらやましかったのである。

私は県立長崎西高校に進学した。が、スポーツは一年間やらなかった。それは中学三年生の担任だった林田先生から「西高校は進学校だから普通に勉強していたのではみんなについて行けない。だからまずは勉強優先にしろ」と言われていたからだ。だから西高校では熱心に勉強した。でも、部活動はコーラス部に入った。コーラス部は一週間に一回しか活動しないので息抜きには丁度よかったのだ。

一年生の終わり頃、成績が安定してきたので林田先生に「部活動をやりたい」と言いに行った。林田先生から許可が出たので私は二年生からバスケット部に入ることにした。チームスポーツならなんでもよかったのだがバスケット部に入ったのは中学時代からの親友の楠がバスケット部に入っていたからだ。楠がバスケット部ではなかったら私はバスケットの道に進んでいないかも知れない。

閑話休題

話を元に戻し、部費や遠征費のことについて話そう。それについては「続チームを創る第三章・チヨ・ヘそくり」で述べているが、ここではもう少し突っ込んだ話をする。

鶴鳴の部活動の経費は、どの部も同じように年間消費する消耗品費、例えばボールとかリングネットとかを買う費用としてそれぞれの部に見合った経費が予算として生まれ、それをもとに部活動の運営をする。高校総体とかインターハイとかウインターカップなど、公式の試合に出場する時には校友会活動費というお金

があつてそこから公式試合に出場するために必要な参加料や旅費や宿泊費などが支給される。それとは別に強化部には特別予算というのがあつて、合宿や遠征を実施するために各部の実情に見合った予算が割り当てられていた。バスケット部は五〇万円だった。それは小分けにして使おうが一回の関東遠征ですべてを使おうが各監督の裁量に任されている。ただし、それも年々削減され平成二四年度には十七万円になった。

鶴鳴のバスケット部が遠征をしたり合宿をしたりする費用は年間五〇万円ではとても足りない。だから遠征や合宿の資金づくりとしては公式の大会に出場する時にJRや飛行機を使わずに私のマイクロバスで行つて、学校から支給されるJR代や飛行機代との差額をプールするとか、私がクリニックをしたり講演をしたるとき謝礼を部費として蓄えておいて、それを部の運営費に回すのである。

マイクロバスも学校や保護者会などには負担をかけず、すべて私の自己資金で中古のマイクロバス（平成十七年には遂に念願の新車を買った）を捜してきて購入し、維持費も自分で捻出していた。チームが強い時は公式試合にたくさん出場するのはへそくりが貯まり、マイクロバス購入のお金は二年で取り戻してあとは部の貯金として貯めることができた（が、平成十七年購入の新車経費は自己資金放出のまま退職した）。

経費をできるだけ節約して部のへそくりを貯めるために飛行機やJRは使わずほとんどマイクロバスで遠征した。遠いところから順に挙げれば、盛岡、仙台、福島、富山、岐阜高山、福井、新潟など、すべてマイクロバスで遠征した。しかも運転手は監督の私ひとりである。人を増やすと人件費が増えるからだ。関西以西は必ずマイクロバスである。運転は疲れるが「これでお金を浮かせる」と思えば元氣が出るのだ。

が、へそくり捻出もそううまくはいかなくなつた。年々こどもたちの数が減つてきて学校の運営を圧迫するようになってきたので部活動にかかる経費も削られるようになり、部活動の運営が苦しくなつてきたのである。この年（平成十四年度）にもっとも苦しかったのが、寮生の食費月額二万六千円を前年までは学校が免除してくれていたのであるが、この年からそれが廃止されたことである。

それも、今年初めて入学する選手については問題ないが、昨年入学した選手の後輩が今年入学するとなると「今年からそうになりましたから」とはなかなか言いにくい。そこで前年入学した先輩と同じ扱いにしてやらなければならないが、その費用は部で工面しなければならない。しかもそれが双子だと倍の五万二千円になる。一年で六二万四千円、それを三年間面倒みてやれば一八七万二千円になる。それだけではない。寮の食費だけではなく、特待生には学校から支給されていた交通費など、段階的に廃止されるようになる。その度に、同じ中学から入学した選手が同世代間になくなるまで部のへそくりでそれを賄つていかなければならないのである。

しかも、国の政策で公立学校の授業料が無償になつたので、勧誘される中学生にとっては私学が特待生という制度で自分を迎えてくれるというメリットが何もなくなつた。そんなこんなで部の財政はますます圧迫されるようになったが、それでも私が退職をした平成二五年三月までは部費も遠征費も一切選手から取らずに部活動を運営してきた。しかしこのやり方は、強いチームを作つて毎年インターハイ・国体・ウィンターカップに出場しなければいずれ破綻する。頑張れクレインズ！